KODAK Color Control Patches © The Tiffen Company, 2000
Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

浴恩木屋日記抄

9
4255

へ9
4255
特

昭和九年
十月八日
購求

東練の京乃後ろに柿の本然石あり西の京乃えひそ所に
栗の本乃號ありてより栗てふ字の形をみるに西の京に
いますなの本国乃名をこそ栗の本れ本ことしハゆくりも
なくそれもまて是なん丹波の玉乃けりすりて濡て
栗てふ名しるとる伝られはさ號ハちのしえをかしきまりて
和さもくらつまな行基それちのいゑしへ字所ひ枝に花み
名のみよ於人わか出ては所せまきて此らちの難波津をを
あふまいて西寺此流立ることあさか山の所さくハ所らなき
おんせらる伝ハとひくる人も山の井に轆轤ちこんし車
立るかしらつきあるせて同しはえみ目くよみさし
つもりく十把一からけ名る葉の如しみ棒よせらくとふつ
よそ庭のそみうりそしいてく落つ栗の名とらかさるを

ヘ9
4255

今の世のくまかりをとしせそんとこゑのまをからつめ
多くる硯のふところあかりたなれとのなかさをさく
栗ぶ花ところとせの行より一とへ後へぬるハ本ならの
花の華なしけやと集をことふき花を てふかき本さき
柿よくるへくひなふる粟のこのこゑしもお月をそなる
のあそしとくちのそゑもかるあて新の本ことゑみ
りなへて多段此網のむかうんこゑを敷よ糸つけん
すきやかしなまある席は歌志部序

ておこのとし

落栗庵月並摺

菓子 摺題狂歌

若菜　石部金吉

七草や唐土の鳥に出されてたゝく所は月を忘りこと

柳露　山の手白人

春の露ハ柳の糸乃むすひ玉風よりさきにまろく人もなし

官女摘草　生壁出間成

花かゝみめされぬ方の摘草は壺皇子に舞ふ小町なるらん

右衛門　二星一日

春風のふくへうまれいののほりあけやくもいでこそ出け

下戸曲名　桜屋安告

下戸上戸の舞あらしよ香花のさけハ春にて桜ふ曲名

山王

山王ばなのいろのゆかしき櫻とそこの花のさかりなるあり　京肥前分量

よ野の花　筑紫友弁

あくのそこなるくんぼのもるり寶永寺にもちんぼの中にさいた花

櫻待花守　平安牡丹

うたゝ寒の水も温つるみてよくかきつそなるふ八橋

菅丞相　芳歌　友恒吉為

みきうため一歌のもさく時ありてうくハ俗ゆるくて要

馬士　文安　茶屋町京廣

やふ船ゝかゝみうけ櫻毒屋うの馬士も論を赤目の山

櫻待　時鳥　櫻之右衛門

一声ばゝ郭みさ舟の明るあ少をおひそのの嘉の櫻月

櫻所時鳥　宇口花九

さつき待櫻所のわらくきすゝ俳せん八声てつ鳥んとゆく

伏見櫻山時鳥　長谷氏器持

箱根山ふゝ声ゝ鳥時ゆる四声ゆ声むゝふくそゆく

古國櫻時鳥　酒盃公上宋

時ゆるくゆ武義とゆ綿のゆ國かけくゆつゝ一声

沖　郭公　小川町住

二声ゆゝ吟ゝそ沖船ゝ船名おおしきの山ゝ

櫻飛枝　朱

ゆ　櫻女　郭公

京ゝ西ゆ四ゆ千ゆゝて郭く時ゆるゆゝの鳥ゆ宮をかけゝ

酒上　不埒

灌佛

芳今のゝゝ月ゆ鉢八仏佛の像せんゝを櫻ゆ稲ゝん鳥

姫牡丹　屋その宛　壬

うつくしき花のさうれ蝶ゝ年牡丹みなゝ絶しまうれ十六

桑家牡丹　屋自酒朱

冨キたハ花ゆつりそうこ夫のあるきこみきたらく蕾

社頭新樹　佐大小弁光

御殿をあるれやうの神垣もそ純や葉の古るかしたる

茨子　義花

出家のくそうちうの蕾の花のちりけよ蕾も出へ稲を

梅子　四谷　紀迪

ちりけふ花ふしと梅の花ふ梅の花ふ蕾もあつれ

古戦場　屋つて　東北

磯ちりくむれ言松の古戦場　紅八艘を

田植　唱歌　歌人　野口儀

そうのの花植田しひつのる唱歌も苗も川分ゆしく

又自酒　金華張　久ゝ木の金光

又自酒ふりやふ絶し傘をたれもつるもそうの

おのしんを　屋自ちうふ

さゝ絶のふるかやそうそ傘をいそつくたれるそうふれそうふ

又自　梅子　高足

ちうこかふふりぬるあもやこうの自の蕾

松田著改　秋風の女房

唖蝉

水ゝ絶ふ水ゝ絶とは足絶とうんとうふ鳴はるしの山れ唖蝉

上野蝉　赤蕾の杉情

上野ゝ山月もへ去の蝉の声かゆをつくゝ佐藤ゆうん

渋団扇　　京かゝのつゝふ

柿ならハ是川しや挿へきをとのえなきれ故涼しきを

垣 夕顔　　存こ那らぬり

降りかゝる露の雫に風をかきゝよるのそくたるの丸夕顔

坂 蚊火　　いめん法師

おちこちの煙ハ門の蚊やりを大工もいつはおもひそめける

去年寺 蚊遣火　　和泉秋 万作

ゑひくもあれ古寺にけれハ蚊遣火をたくちつの僧

寶 蚊遣火　　新 午 宥

室の戸に是も殺生蚊いふしと思へハたゝれよさに揺られを

寛 夕立　　子のる丸 綠義

夕立の雲れたゝやあしさ取てぬかなさるに蝉の笑ふる

三

おふゝしころを　　末那ら 廣忠

ふきりの風をりおもとハ夕立の旅人もきの宿かかりて

おるのしんとを　　堺 愚の徳弁

夕立に今あふ坂と旅人の氣も関に立る雲のたゝあし

瀬戸 夕立　　志摩の虎人

月さえ名の下ふるに数多へく是て蜘宿を忘れ夕立

地紙売夕立　　坂大分 貴妻 秋

地ニ売せ夕立にあふきさへ骨まてぬれてうけやのとふく

住吉 夕立　　四谷口 馬蹄

いろけよく旅さきかちぬ夕立のふるや奴も雲れたゝあし

山家涼　　陸奥 那須 谷鳴

あゝむもとてもち居子宿かの戸を明て宿をこゝ山の松の下居

あるじんを　　漆の上猫丸

山伏は狸のつゞみ松の琴ひかれハならしまきのむらさき

あるじんを　　川井物梁

やまかぜハ見ぐるしまるも打しきて谷そこまでの夕涼みかな

あるじんを　　紀之盛年

宗匠のよみもいはるゝ草の白は風すゞの唐を吹てあく山

武士納涼　　百月秋吉

乳たるき人好むの武士の身なるゝハ汗の玉ちるうち涼みかな

山伏納涼　　吉岡野河盛

先達の身にふく風のきゝかげみるかも荒しき草もちりや法のうちみ

貸屋納涼　　下染野呂吉

貸ぬしの床ばる流のきしきて我家のあるじの夢のせん

舟納涼　　酒小寿人呑口

舟のうち涼さをあまりなき茶てもあまりきんハつるゝ風の三ッ綫

山王祭　　雑司谷風車

神いさめ象のおそれしきぬりて見ハさんまにかまわず

角田川法筏　　仮橋口つ打

こ人のうきさもまでに角田川花ハこぼるゝ浪のちる車

きぬきん法筏　　何野何某

川舟にあつめかけて田楽のいくつ紙竹にて法筏すらし二本

花筏　　川原之友江

清き水に流す年の末の法筏もなきみをのうちにひたし哉

初秋　　退牛千里

笛の音もたえや秋風の吹よせむると荒あらひ哉

七夕　　京　満色

ちぎるとは牛ひこぼしや星ならんそとおそしや待ており姫

おもしろき　　紀友原吉丸

おもひあや下からん形ハ今あるらんあるらひ京紀書子掛稽

七夕扇　　盤昌胡真

なかを秋て星のあふきのおもおく夕へそ秋の要なり

七夕素麺　　大坂大塚氏

星合の河に此川越素麺を茶葉のたしにかけてそうめん

盂蘭盆　　京法師

借様ハ孫んひ釈寿利もやつて掛られもせぬ盂蘭盆

施餓鬼躍　　秋　物朱

手をとるのよひのもおもしろ枕子かのハととうふ吹ても吉帝

擣衣　　吉野紫蕾

ききくのありしむかしの音を今も京都にきこゆつらん

名月　　近也年寄

秋もこよひ袴の手にもち月の一つまんくあるかげのこぼる紀

名月　　浦見二丁綱

くもりなき猿子比る影をえよとこよひハてる下一の名月

山月　　今城なる木

さえわたる月の種のつる孫あと山のうしまてたれてみえけり

裏店月見　　河酒引綱

月見んとあひしき家のうら店ハさし入門のえんとあし浮

挑灯待名月　　京舟坊砺町

挑灯子月のこしきえとこもち月のあきハ初めてみんと浴泉

唐詩月　ぬけ書の返左

さらさらと雲ゐやうをも吹きせて家は長安の月えらうし　呂南女

月夜拾

蛤のふたみわかる月かけの見るかもそへて吸もののせん　藤扇法師

武蔵野藤

かたへんまての十六むさし野で萩のをみなへしもとまるやさらに藤　常盤阿馬

小夜碪

おさまこのあきてをくは秋の夜乃ふけて待ん衣うつこゑ　紀野东奴

裏店擣衣

おとなりのたくきまとうし店八九戸人ひとの世わきき あきさまに　深谷楼要

角力夜衣

夜やさむき夜や夜さむに角力取る衾のうすき風やひくらん

古寺虫　坊野秋葉

きむしのなる寺も今はなや庭の苔のむしの声

神之野虫　和気木野芳人

八つ九つ耳をふりたてて聴きの声もするるの京乃中に

菊角力　胡起之胡光

よりかくへ出るて組ををも三分のなのりをきくの花角力かな

海邊角力　行色野玉光

西東角力をとらはいつも海樽のかうへやみよするのきる

賀屋和　文者鹿年

立かわる菜のふる宮北流山呉札も茶毘とかる飲料

練屋時雨　田町奴加尚

ためもかたきかはする村まへてれいつもあれ見す際あるなん

口切時雨　　か茂之羽音

口切やみなりたつりのむら時雨みも茶せんのふりみそゝげ
山　七　　江戸のなみかけ
富士は今銭かしらの雪に比叡の山たるちんかり人ハ人ても
嵩山 初 京　　から衣 楼嗣
今しなもいもてんておきめたかさ弥やつけめ、京のたかせ川山
丹 京　　八面伝みぬき
きのひくいんぬ思ひみ山嵐の気てのいろはつんせしやと
嵩 齋 京　　和気那梅丸
きつれもをかきの終乃さえて思ひハつゝおしらふの鶴
あすしんを　　友弥道悟
言冴の尾上のかほれ来つれハちんといふ日をかつえうりあり

不見 京　　根吉 浦門
又九もせ九みなせぬ思ひへ札に穴のむしみの音をのこそ〱
梅千 京　　太かの商人
身をきつ出来あゝの系のさしもさしもともえのを当思ひや
弓師 京　　東京 胡蝶
思ふかけいきつききうちも猿てむさきん引てこそつんあ
半士 京　　若松 嫁く
その〱ふ乃矢つけんのひか身は妹のやみきのおゆくなかり
嵩焼 飯 京　　あかねさの衣紋
あかれ北もふ人は旅しなふりこの身ハやきいみ手むすもたかるを
嵩音 京　　夜乃玄ふへ堂
裏表なりても咲てもいくれ猿ハ草は不何雪きのありえてゝ

大木戸高弁

麦粉高

いひせんはもちあつらへ麦ふかしかくをまこさみ西せうへり胸る

苦苦麦高

つらしともあるのんみのひとをきそそはをそなれぬ二八ふり神

餅花此つゆ如

十雲盛高

十雲盛高

十雲盛の西あつより塔の雲をかけてとりみき中のかをに

ゆるあのたる海

車高

ひくかさへよるはうつくみ美もうえくる海高しく海そそのと

酒香友成

蕎麦車高

我高ハか蔵のあふひをえあつしてくる角あそ雲をとて

垣脇此人まを

山吹高

七宝八宝かさをて思ひ山吹の花をあいた取人そつれみき

菊師此盤古先

桂高

我ちきる床柱の春のかさりて法ゐあ六ていとあれるこのそて

角刀高

お高此四角

高紙帳高

池端のさよふり

ちそくくしてを紙帳へ西へとハ鶴をもむそふのかくの法けみや

連歌是毛宝蔵

麦高

かをあても思ひ高をもそる雲のあこき中をあさ沢そら紀

楊枝高

京ちみきの海ふ

胡ろくちみんをこかくのはきをつうひきる楊枝ふりそり

蕎切生大高

ひさかのさくる

いふそれ一時のつくさあ引ケてそひ移も安き高の吸やり火

大原の憂住
寛保三里憂保
医者小路七郎
大原安孝
紀定包

寄題扇面

春下駄 京

ちゝのみの葉のはらきみ思ひ相の下紐ふくかされて行ちんたのり

寄雨 京

降ひもなくく年をふる雨おもてふせるひさし孫の庵

寄刀 京

はるのゝもつるそれかこの面思ひこゝろれやと丹と思ハ志ゝ

おもゝ

やつれてハ人ゝそこゝのこゝろれやきひとり孫さそのあそ思つゝさよ

寄田楽 京

貝尾 亜吉

ゝそめつる高みぬる高ハ田示のゝしゝくもをこかゝこそそれ

寄瓦 京

あ神くゝ中を瓦川の立ゝゝれたゝて八海ゝのゝゝあいて思ひ

寄牛 京

あたゝぬ歩ハ牛のゝゝれ乃あのみゝゝゝゝゝかきあゝたゝ

神主 京

かゝゝゝ世神ゝちひをゆゝゝすきかけゝゝゝさけのゝ思をこゝ

寄硯 京

思ひそめ硯乃海のふき中人めゝゝのひて高をゝるすゝ

寄傘 京

たゝゝ世ゝゝゝゝ歌の思葉ゝゝゝさゝゝに高のゝゝ世山ゝ

寄柏餅 京

ふゝん きて独 移ゝゝハ柏餅 歩のゝふゝゝて高をゝゝゝ

抑的 安勾 函

江のかゝ高

2

寄蝉恋　大木戸錦江濱

きぬ〳〵のうらみは尽きて空蝉のぬけからとなりて別れそうなき

寄茶碗恋　小諸のとそうつ

荒川さのふの茶ちハせふと茶碗あらはれやすき恋もする哉

寄障子恋　琵琶石の女

いつはりあらて月日をこし障子窓のあなあぬくこゝろの紙

寄算術恋　山ニ八耳喜

あまちのこんと折紙太刀てハきれぬ思ひのたけ果足ぶ

寄三味線恋　太華一三味

三味線の嫁縁ハあんのさわりして皮のをされぬ中と隠れ

寄時計恋　江戸川知加久

待てるあかこゝのさけの尺時斗ひとりいふてあハぬ恋うき

寄花火恋　山道ゑるまた

むすふへきえんの総火の折をえて気ハ高きのなりかも

寄鶯恋　池田諸白

まちかねて待らる君は声ら路や鶯をふえの声かはもせぬそ

寄綯縄恋　待甲斐之前相

ころしきはあさけすくしき子のはぬ縄やうきともま田のいけにこかつ

寄古着恋　棹石八守

我中は古き小袖のすりきて肩ちもむ袖もちきれくぬ

寄紙恋　蹄見老夜

こゝろかと紙も紙あかくみのとりかさとおもひこけさる

寄灸恋　みすのあくろ女

かたきのうすきちさりかもえさけてあつき思ひハ身に焦しるゝ

寄釋恋　　紀きのつらゆき

かくこのみてちきりしるもかさなるあさをいふとかりこ

寄化物恋　　たくかさのむさゝ雲

ふさめしこのゝ人をあはるゝやゆしとつゝなこの中のあ事

寄狂言恋　　少将小人

二世をかけて契るゝハあるかなゝい行んあとやくねるすせよか

寄茶碗恋　　凡河内人成

いひしら絶と知とそ思るかけ茶碗とられてハそ思あはあ取ゝ思る

寄歌合恋　　酒上安田丸

山風の荒れひとゝみのゝかけもものをもいとゝ思ひのゝ

人伝口言　　早稲田公羽

ちゝゝもれ者みかきゝのそ言ゝれたゝ祝のゝ城ゝゝゝけてゝれ

寄猫恋　　紀貫朝臣

都ゝゝゝまゝ猫のつゝゝて月の附さゝもあそゝ思ゝそゝき

寄風恋　　紀之国守

あけつゝてそゝゝゝゝゝれ女ハ色の独風のひゝゝゝあつゝん

寄屋敷恋　　吉原初重

恋やゝこのゝゝ屋敷乃ゝゝゝひ思ゝ杖をつゝゝゝこのゝゝゝ

寄稽書恋　　鼻下長面

稽書のひゝの姿を色ゝ初ゝゝあゝそゝあゝゝゝゝひゝる武

寄狂出恋　　歌子定本

くゝれ女ゝふりつけられて狂出のゝゝゝゝ稽古のゝそゝ

寄炯稽恋　　素交聖秋元

酒の炯ゝ手ゝかゝりゝる恋ゝゝはさゝゝゝゝいやとゝゝゝゝゝ稽

飯盛峠別　四方赤石

旅人の別れをしり給ひつめてあこがれのあををみきりめ〜そり

山市　転　　安倉方丸

山の端の月のみかををうかべてはさく棹　庵の尾花さつ波

周居　魚好　　智恵周子

八重の霧　ちりく門をさ〜もくさきて　いつきの山さみも見え

宮中　生鮮　　安東　三和

面つあさ〜もかふり我かくふびていつまてをを花をみる

源　家　　多樹　武雄

紅葉のよををなれ家のうひ行る霜をおくそまもつ人ぬ夕暮

老人　吹笛　　いつものお秋波　周憐　松年

曲ものいやいやん老の身ハ海ををもそるく年の雪

三る士之味線

山さのの乃ハ二よりさ三ちりてそそ馬のかんところるれ　芋坂仲正

嵐三味線　　蜜神もく網

三味線のかく〜嵐のひき笑ゑ　あく〜てくかりそそぶれ

雨中酒盛　　自分赤子謡

村雨ハ降るあの秋ヒも酒盛のをるをあさくてさ〜板ません

食禁　魚書　　小川　ほく芝

あく八食鉄禁ものひををて猪ものこ乃ハ　酒義ものく成保

夜　尺八

尺八のあるあるものを猪ものく我もひと節の秋ことめさく

大一度　　生蔵　千種

実ものの乃ものををもををを鶏ものをもつをてあ〜ふ一度の乳ものくそて

業金海駿　　古義山森

大佛のたちるもおのれ一本草木金玉くしれるものあくまれ紙

川　洗濯　　鳴戸破損寺

紙のあハ長きあるを洗濯の袖ぬるとなるさるの川　秀

天人　洗濯　　洗牡丹稲の方

天人はまれに霓裳羽衣ひるがへるまたゆくさるる

曉　洗濯　　月　南丘

洗濯を云ふ夜乃ひるきハそくるもあく日ひのうるあり

角乃れ　矣作　　物年時浦段　馬場金海

寅丸の丘（むつかさ）ものさきしてはたをひ稲るかたち

彰世　第　　多經　鐵師

あら世第　東本ものれ寅ものもこちの人とや風れふくらん

十二

晩　猛

ひとつ石ふ猛ものとかて（て）猛猛はいつくれ猛ものれ日そ

戰場　鳴　乘　　細破損針　業

思ふつ石（ものの如平本のまけ鳴乘一本ん石ものれ鳴ものる武

月　取　蟹丸　　山中　立本

蟹丸の海ものく後義を夕有取本ものく仲人のものそれ

河の音ノ蟹丸　　業物研磨船志

西ん独いハいを丸山の花ものあ丸ものよりものく川を郭武

古弟　鏡　黄　　二　本　月　西

古弟西ものれ一かりものの海ものくあハあ月ものの月ものを鏡黄

後　嘉　鈴　国　　つまり辺　赤　猖

西西後　碎ハさの州のかく徒利ものりさけそれハ後の驚ものを

石川億倍　明石信家

この神のみや神の浦きてみれば名ふらつこのつゆやさきのん

信太女房　志賀の桃実

中三のかくしあらそふこころかへるけんのけんさけ

摂津国　有馬郡剣

白たえ八潮そ山のやをおそてさらす海女のそてのつゆ

書為　信太の森

そろあしの文を拾のひとゆりそてもちんの散郡の夏

神を祭り　猪方里志丈

朝きりをたつひきよめつ神立のみや樹てり社森山こえ

已侍　紀伊

已侍とそ七月の日比過つ秋八潮りあ紅の信の猪

掛硯歌

志面　長

高さはの高岳陀尼くり秋も樹の稀そんの歌そんとなる

寺　条　　小向　武士

秋文秋毎の兵為名のふりつ秋けり市寺(ほめる)なるへし

建　広　　板家　常姫

建広は都のこたくも樊八世そめ(あ)にのうれやうり

猟人　紀伊　　文屋　延命

猟人は見も広生紀の高南海のくふやまそつ(ー)こう

如見　中　　朱雀　黄江

四つ石を鶴とはきりやそ高をそんそ八度かーらとも雑うらく(き)

今持　迷　　平　尼

残金のおーかるぬ月もそ(ぬ)秋八小判のあーのあれてくやーき

松平述懷　御慶法師

老の身八何ぞ訪るゝ人の紅涙かたるゝ〳〵の紅涙そゝぐ

一文字自撰

東根著述懷

面影ふるき昔かたりて年のつもれり〳〵ぬしの去とゝもに

宗隆　述懷

宗雄　自詠

數ならぬ人まの育乃かゝるゝ身ハ琵琶をも世をもゝ人〳〵ゝ

大神樂述懷

朝森　盈起

ゝゝて業ゝゝ蓬ぬけ大神宗ゝかゝ〳〵てまむ曲まるゝ

宗　夜述懷

畑野　睡道

ゝゝあゝゝて人のゝゝたてをあゝゝ年月をつゝる面ゝゝ

海日自

宗雄　夜面

傳人を改宿ゝゝのつゝゝゝ人有此報をも人ゝあゝゝ

宗　獲物述懷

紙屋法師

海の世ゝをはのゝれかゝゝあゝゝ紙もせ年ゝゝゝの分ゝゝ

宗　淺知

神ゝ屍

宗　淺知

宗雄を知ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

花市　淺知

雲下大神樂

ゝゝ神ゝゝいさや神樂をまゝゝゝゝ窟ゝゝ神ゝゝゝゝゝゝゝ

宗　楊神紙

紙

盆踊　茶人

楊ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

宗　史沖神紙

叢市　淺知紙

神の風あゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

宗　神紙唱歌

宗　松井　茶

唱歌とて理ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

宗　松井　茶

題 紙幡神祇　　舟杖　平かる

くれなゐの紙をこまかにきりてあつまりの客人の名

題 竹杖祝　　加保子　えん威

一ふしあまる代をこめてる竹杖もつのぬんこそ多成めてされ

題 酒祝　　松野　ちとせ

たんのうせあかるむ多をいくよの代も末為くと祝て帝波

題 弁当祝　　古淵　猪雄

箏のおひさきハ千代万代もそそそそ拾ふ市袋舟式

題 鋼祝　　梅野　政成

四海波高つの四方の幣ゆ舟めてふとそそいそひつるうも

題 筆祝　　大東　子石

千代まてをかきれる竹も毫甲の筆ハ百万代やへん

十六

題 傘祝　　辻くらの長吉

一ふしの幾代ちこあて傘の柄乃ちくる舟のたをこ平ゆく

題 井祝　　紀信年

車井ゆよりたゆ乃の毫の甲つるま千代長吉のあきる命

題 筆祝　　紀　る婦安

あまの海れる高るしれ筆の法なのくかきつくれぬ志のいのちを

題 海祝　　尺宗雄　呂耳

法りてゆさこのなる戸のあ海の法風もひのあ市代そ高つき

題 百足祝　　明治　吉人

ひのしあのみうこの山のむそをもなりきああしふりかひん

題 河祝　　鄙陸　中道

高つのるる法代のふしや家をこつ法の雄乃ひくそるもよのあ

芳草双紙祝　　芳の庵金交流

芳草双紙ゝ繰ゝ花を咲こゝろを角とそゝ〳〵めてゝ〳〵さ

芳踊祝　　麻伊紙十四郎

松竹を千世のちゝめる踊ゝ花ゝそゝ〳〵て〳〵西王母

芳石臼祝　　藤堂方庵

〳〵ゝきな花ゝ春のみゆ乃石ゝ神ハ世代のゝめゝ〳〵ゝ人〳〵そ引臼

天明三年卯十月